

青森県における温泉施設の現状と課題

— 休・廃業の実態調査をととして —

The Present Conditions and Problems of Hot Spring Facilities in Aomori Prefecture through the Fact-finding of Suspended or Closed Business

谷口 清和*

Kiyokazu TANIGUCHI

キーワード：休・廃業温泉施設 (suspended or closed hot spring facility) ・
温泉力 (power of hot spring) ・経営支援 (business support)

1 はじめに

本稿は、青森県における温泉入浴施設・場の休・廃業状況を調査・分析することにより、温泉施設の置かれた今日の状況の本質を抽出し、施設存続に関する新たな方策等を考察するものである。

温泉入浴施設・場の休・廃業状況をフィールドワーク手法に基づき現地でのヒアリング・観察を主たる研究手段として、①休・廃業施設を対象とする視点、②3.11東日本大震災&福島第一原発事故という未曾有の災害年を跨った観察期間、③施設維持困難先への聞き取り・実査に重点を置いて調査・分析する。

この数年間、温泉施設において急激に進行する休廃業の事態を対象とする先行的な研究はない。従って、先駆けて休・廃業の実態と課題を捉えることが本稿の主目的である。

2 青森県の温泉資源について

青森県は2013(平成25)年3月末現在で、温泉地数143(全国第4位：①北海道、②長野県、③新潟県)、自噴と動力の総湧出量139,315 L/分(全国第4位：①大分県、②北海道、③鹿児島県)、源泉総数1,093本(全国第6位：①大分県、②鹿児島県、③静岡県、④北海道、⑤熊本県)、温泉利用の公衆浴場数は291カ所(全国第7位)と、日本でも上位である。また、入浴可能な温泉施設等は平成

26年7月末現在で362施設となっている(表1)。さらに青森県が発行する「ピカイチデータ数字で読む青森県2013」によれば、人口10万人当たりの公衆浴場数(温泉銭湯を含む)は24.8軒(平成22年度)で全国1位であり、温泉・銭湯入浴料購入金額が県庁所在市(青森市)で一世帯当たり7,270円と、これもまた全国1位の数値である。

このように全国でも有数の温泉県であるにもかかわらず、この10年間で85軒の温泉施設が休・廃業し、衰退が目立っている。

こうした現象を検証しながら、実際に起こっている事例を取り上げ、温泉地における温泉施設の現況・課題を考察する。

3 青森県における温泉施設等の分布

青森県の温泉施設の分布をむつ湾沿いの東津軽エリア(青森市含)、岩木山津軽平野部の中南津軽エリア(弘前市、黒石市、平川市含)、日本海側の西北津軽エリア(五所川原市、つがる市含)、県南の八戸・三戸エリア(八戸市含)、八甲田山東側太平洋岸の上北・十和田エリア(十和田市、三沢市含)、下北半島の下北半島エリア(むつ市含)の6つのエリアに大別し、「図青森県の温泉入浴施設・場の分布」に表した。青森県は本州の最北端にあって、三方を太平洋、日本海そして津軽海峡・むつ湾に囲まれている。また、三方の

*温泉地活性化研究会 (Research Society of Activation for Spa)

なっている。

実際には26軒の施設が無くなっている。地域的に見てみると、津軽・下北半島の4地域が合計263軒の施設を有し、八戸・三戸、上北・十和田の2地域99軒の2.6倍と、太平洋側の温泉勢力が少ないのが施設数でも理解できる。以下各エリアの特徴を考察した。

(1) 東津軽エリア (含青森市：浅虫温泉郷)

代表的な温泉地である浅虫温泉郷は過去20年間でピーク時1991(平成3)年に24軒あった旅館・ホテルは、現在11軒という半分以下の衰退ぶりである。また温泉愛好家に知られている田代元湯は吊り橋損壊とダム工事の進展でとうとう入浴不可能になった。

浪岡地区では長年営業してきたモールを含む黒い湯の娑婆羅温泉が後継者難で24年の歴史を閉じた。また三内丸山遺跡に隣接し、多くの温泉愛好家に親しまれている三内温泉は、平成24年に休業した。平成26年4月から営業を再開したが、湯勢は未だ定まらない。

(2) 西北津軽エリア

(含五所川原・つがる市)

宿泊施設ほか温泉が閉鎖、経営者が変わって日帰り入浴施設「海のしずく」として再生した。また、鶴寿温泉がリニューアルして「ゆったり館」として再生。同じく2011(23年)3月以前に休業していた音次郎温泉がリニューアルして宿泊施設として営業を開始した。廃業施設(金太郎温泉)を考慮してもこのエリアの施設数は変わらない。

(3) 中南津軽エリア (含弘前・黒石・平川市：嶽・百沢・大鰐・碓ヶ関・黒石温泉郷)

古くから湯治客に親しまれてきた湯段温泉「長兵衛旅館」が昨年の大雪で崩壊し、入浴不可となる。また、岩木山を眺望する露天風呂がある嶽温泉「高原の宿山楽」が経営不振で廃業となった。さらに薬湯として知られる秋元温泉が後継者難で廃業し、これで湯ノ沢温泉郷全体が消滅した。

(4) 八戸・三戸エリア (含八戸市)

表1には計上されていないラジウム鉱泉で知られる八戸市の金吹沢ラジウム鉱泉が2012(平成24)年9月に閉館となった。

金吹沢診療所の併設施設で、趣がある温浴場の閉館は残念なことである。この温泉は青森県の資料に記載されていないので、表1には計上されない形となった。八戸市内にはこの他にそれぞれ独自の井戸水を使用した趣のある銭湯が13軒もあるが、冷鉱泉かどうかは判別が難しい。

(5) 上北・十和田エリア

(含十和田・三沢市：焼山温泉郷)

2003(平成15)年に開業した十和田湖畔温泉では、ガソリン高騰に加え、3.11東日本大震災・福島第一原発事故の影響(風評被害)を直に受け、この3年間で5軒の旅館・ホテルが廃業となった。また、文人・大町桂月終焉の地となった薦温泉が経営を地元資本の(株)城ヶ倉観光(城ヶ倉温泉)に身売りした。

(6) 下北半島エリア

(含むつ市：下風呂温泉郷、薬研温泉郷)

薬研温泉郷では野湯「隠れ河童の湯(竜神の湯)」の湯船が「道路から入浴者が見える」という理由で撤去、入浴不能となった。また、廃止ではないが、露天風呂「河童の湯」がやはり同様の理由から湯船を覆う改造がされ、混浴も原則禁止の男女時間制による交互浴となった。湯野川温泉では廃業1軒(湯野川観光ホテル)で、同エリアでは2施設減となる。

一方で、津軽海峡に面し、古くからの温泉地である下風呂温泉郷はここ20年間営業する旅館・民宿数はほぼ変わらないものの、作家井上靖が逗留した「海峡の宿長谷旅館」が2014(平成26)年4月から休業している。また老朽化した温泉宿「さつき荘」では、娘夫婦が東京からUターンして施設内装を現代的にリニューアルするなど、下風呂温泉郷全体に活力が目立つ。そうした中、下風呂温泉女将の会を中心とする温泉経営者の頑張りが観光客の支持を得ている。

表1 青森県の温泉入浴施設・場（温泉施設・共同浴場など）の増減

施設種類 ↓ 地域分類	宿泊施設	温泉銭湯	地域コ ミュニティ	共同浴場 等	23年 3月計	増	減	26年 7月計
東津軽エリア (含青森市)	(-5) 26	(-2) 26	(-1) 5	(+2) 0	57	2	8	51
中南津軽エリア (含弘前市・黒石市・平川市)	(-5) 74	(-1) 33	(+1) 12	(-2) 14	133	1	8	126
西北津軽エリア (含五所川原市・つがる市)	(+1 -1) 27	(+1 -1) 13	6	1	47	2	2	47
八戸・三戸エリア (含八戸市)	9	20	0	1	30			30
上北・十和田エリア (含十和田市・三沢市)	(-5) 38	(+3 -1) 27	(+4) 3		68	7	6	69
下北半島エリア (含むつ市)	(-2) 26	1	6	(+3) 5	38	3	2	39
施設計	(+1 -18) 200	(+4 -4) 120	(+5 -1) 32	(+5 -2) 21	373	15	26	362

(注1) 2011(平成23)年3月青森県観光交流推進課発行「あおり立ち寄り温泉ゆめぐり路」を参考に筆者の知見を加え筆者が精査・作成した。2014(平成26)年7月末現在。

(注2) 青森県内にはこの他にもたくさん入浴施設があるが、作成基準は誰でも入れる施設・野湯等とした。

(注3) ()の中は2011(平成23)年4月以降平成2014(26年7)月末までの増減の数値である。

4 青森県における過去10年の温泉施設の休・廃業について

過去10年間の温泉施設の休・廃業の推移状況を調査した。本論では、青森県の温泉地の現状を時系列で把握可能となる「表2 青森県における2004年から2011年2月までの休・廃業温泉施設」、「表3 青森県における東日本大震災以後の休・廃業温泉施設」、「表4 青森県における過去10年間の休・廃業施設の再開」の3表を掲示する。

(1) 東日本大震災以前の休・廃業施設

東日本大震災以前の動向を表2に整理した。調査対象期間は7年間であるが、休・廃業施設は28施設にも及んでいる。特徴は休・廃業事由「不明」が10軒である。基本的に経営不振と思われる。1996(平成8)年以來の燃料代高騰や経営資本の弱体化がボディブローのようにジワジワと温泉施設の経営に及んでいることが推察できる。

(2) 東日本大震災以後の休・廃業施設

東日本大震災以降に休・廃業した温泉施設を表3にまとめた。経営破たんの大きな理由としてあげられるのが、2011(平成23)年3月11日に発生した東日本大震災であろう。日本海側の山形県、秋田県、青森県は福島第一原発事故風評被害の補償もなく、何らセーフティネットのないままに今日に至り、休・廃業が相次いだといつてよい。

(3) 温泉施設(地)の衰退

温泉施設の休・廃業の事由はなかなか把握が難しいが、表2、表3、表4から温泉施設(地)衰退の本質を以下のように抽出した。

まとめると火災が4軒、不適切使用(ダム水没、不衛生等)が5軒、老朽化8軒、経営者病気・死亡・後継者無が10軒、営業不振・破たんが22軒である。不明、その他の事由も多くは経営的背景が休・廃業の引き金と思慮される。東日本大震災を直接の休・廃業事

表2 青森県における2004年から2011年2月までの休・廃業温泉施設

施設名	所在地	休・廃業事由	休・廃業年 動向
なりや温泉	湯ノ沢温泉郷	休業：経営者病気	23年 1月
三千石温泉	板柳町 三千石	廃業：建物老朽化	22年 10月
一ツ谷温泉	五所川原市	廃業：不明	22年 10月
西北温泉	五所川原市	廃業：不明	22年 7月
小田川温泉秀吉のやかた	五所川原市 嘉瀬	休業：火災消失	22年 4月
大鱒山荘	大鱒温泉郷	休業：整理	22年 3月
小曲温泉（秋田谷旅館）	五所川原市 小曲	廃業：不明	22年 3月
花の湯	青森市 千刈	休業：不明	22年
寿の湯（共同浴場）	大鱒温泉郷	休業：建物老朽化	22年
光世温泉	五所川原市	休業：不明	21年 11月
西北温泉	五所川原市	廃業：不明	21年 6月
グランド温泉	青森市	廃業；経営破たん	21年 更地
雄乃湯	中泊町	廃業：営業不振	21年
六ヶ所温泉	六ヶ所村	休業：不明	20年
湯の沢山荘	湯ノ沢温泉郷	廃業：経営者死亡	20年
あすなる荘	弘前市 百沢	整理：利用者減	20年
青葉温泉	八戸市 青葉	廃業：不明	19年 11月
千金温泉	佐井村	休業：営業不振	19年 2月
七百温泉	六戸町 七百	廃業：経営者死亡	19年
六川目温泉	三沢市	廃業：後継者難	18年 4月
奴温泉	金木町	休業：火災	18年
日計温泉月乃湯	八戸市 高洲	廃業：不明	17年
城ヶ沢温泉	むつ市	廃業：泉温低下	16年 更地
国吉温泉	弘前市 東目屋	休業：火災消失	16年 放置
美山湖温泉	西目屋村	廃止：ダム水没予定	16年 撤去
阿部城温泉（共同浴場）	むつ市 川内町	不適切利用（衛生面）	16年 撤去
戸山温泉	青森市 戸山	廃業：不明	16年 放置
板留温泉（共同浴場）	黒石市 板留	老朽化&立地危険	16年 撤去
計 28 施設			

(注) 新聞報道、現地調査等から筆者作成(2014年7月末現在)。

由に掲げたのは2施設である。東日本大震災以後3年間の休・廃業は32軒、全体の37.6%にも及ぶ。また、少ないが見逃せないのが、北国特有の雪害による施設の崩壊である。

青森県では湯段温泉「長兵衛旅館」、秋田

県稲住温泉、北海道ニセコ薬師温泉がやはり昨年の大雪で建物が損壊、休業している。

(4) 温泉施設(地)再生の原動力

厳しい経営環境の中で再生・再開(経営者交代、リニューアルなど)した施設が表4に

表3 青森県における東日本大震災以後の休・廃業温泉施設

施設名	所在地	休・廃業事由	休・廃業年	動向
こやなぎ温泉	青森市 小柳	休業：火災発生	26年7月	
モヤヒルズ	青森市 雲谷	休業：ポンプ破損	26年6月	
長谷旅館	下風呂温泉郷	休業：後継者無	26年4月	
茶臼湯(共同浴場)	大鰐温泉郷	休業：建物老朽化	26年3月	
五代温泉	弘前市 五代	休業：不明	26年2月	
婆沙羅温泉	青森市 浪岡	休業：不明	26年1月	
羽黒湯(共同浴場)	大鰐温泉郷	休業：建物老朽化	25年12月	更地
南部屋本館	浅虫温泉郷	解体：建物老朽化	25年11月	更地
ホテルヴィランティ雲谷	青森市 雲谷	休業：営業不振	25年11月	
高原の宿山楽	弘前市 嶽温泉	休業：営業不振	25年10月	
金太郎温泉	五所川原市	休業：不明	25年5月	
ヘルシーイン浅虫	浅虫温泉郷	休業：営業不振	25年	
ホテル萩乃	浅虫温泉郷	廃業：経営整理	25年	
田代元湯	青森市 田代	連絡路損壊(ダム水没)	25年	
あずま湯	青森市 花園	廃業：不明	25年	
金次沢ラジウム鉱泉	八戸市 金吹沢	閉館：建物老朽化	24年9月	
民宿じょっぱり	弘前市 羽黒温泉	休業：建物老朽化	24年8月	
秋元温泉	湯ノ沢温泉郷	廃業：後継者無	24年3月	
十和田観光ホテル	十和田湖畔温泉郷	廃業：営業不振	24年3月	
湖畔荘	十和田湖畔温泉郷	廃業：営業不振	24年3月	
旅館 孔雀荘	十和田湖畔温泉郷	廃業：営業不振	24年	
十和田おいらせ荘	十和田市 奥入瀬	廃業：営業不振	24年	
十和田湖温泉ホテル	十和田市 焼山	廃業：営業不振	24年	
長兵衛旅館	弘前市 湯段温泉	建物崩壊(経営者病气)	24年	
浪岡温泉旅館	青森市 浪岡	廃業：東日本大地震	23年3月	
岩木温泉	弘前市 百沢	廃業：建物老朽化	23年	
長崎温泉	東北町 乙供	廃業：経営者死亡	23年	
湯野川観光ホテル	むつ市 湯野川温泉	廃業：営業不振	23年	
隠れ河童の湯	むつ市 菓研温泉	廃止：道路から裸が見え	23年	湯船破壊
板柳温泉	板柳町	廃業：後継者無	23年	
くさぶえ温泉	青森市 小畑	廃業：不明	23年	更地
コロナ温泉	青森市 石江	休業：東日本大地震	23年	閉鎖
計 32 施設				

(注) 2011(平成23)年3月から2014(平成26)年7月までの休廃業実態を新聞報道、現地調査等より筆者作成。

示した25軒である。

この内訳を見てみると、県外資本(大手系)が7軒の温泉施設を再生している。星野リゾートグループが3軒(古牧温泉、奥入瀬溪流グランドホテル、大鱈温泉錦水)、伊東園(谷地温泉)、極楽湯(ラッコ温泉)、秋田県秋田共栄観光(まかど温泉)、群馬県さくら不動産(浅虫観光ホテル)がそれぞれ1軒である。

また、最近の傾向としては老人福祉施設(例:ディサービスセンター)への転用も目立っている。さらには、青森県の温泉でも老舗とされる蔦温泉が地元資本の支援を受けて

現状のまま営業を続けるなど、地元資本による地域の温泉文化保護の動きも見られる。

温泉施設(地)再生の原動力を整理すると次の3項目となる。

- ① 外資系、大手系資本による再生
 - ・温泉施設の系列化
- ② 老人福祉関連施設などへの転用
 - ・温泉施設の福祉施設化
- ③ 地元資本による温泉文化の維持
 - ・貴重な温泉施設の保存

表4 青森県における過去10年間の休・廃業施設の再開

施設名	所在地	休・廃業事由	廃業・再生年 動向
浅虫観光ホテル	浅虫温泉郷	競売: 経営破たん	26年5月落札事業継続
まかど温泉	野辺地町 湯沢	破産売却(秋田共栄)	26年1月 宿泊限
花岡荘	青森市 浪岡	休業: リニューアル予定	25年6月 建築中
蔦温泉旅館	十和田市 蔦野湯	経営断念・土地建物譲渡	25年5月 事業継続
鶴寿温泉	鶴田町	休業: 23年9月	24年再生(ゆったり温泉)
大鱈温泉 錦水	大鱈温泉郷	経営委託: 23年7月	23年7月界津軽再開
相馬やすらぎ館	弘前市 相馬	23年3月休業(リニューアル)	25年3月再開
むつ湾温泉	野辺地町	日帰り入浴廃止	23年 宿泊限
八戸温泉駅前旅館	八戸市 尻内	廃業: 不明	22年8月老人福祉施設
高増温泉檜山亭	板柳町 高増	廃業: 22年	23年4月老人福祉施設
音次郎温泉	五所川原市	休業: 22年リニューアル	23年8月再開
厚生年金ウエルサンピア	八戸市 東白山台	経営交代(ク*ラント*サンピア)	22年
ほっかぼか温泉	鱒ヶ沢町	休業: 21年12月	25年6月再生海のしずく
成田温泉客舎	大鱈温泉郷	廃業: 21年旅(宿主死亡)	日帰りは継続営業
ウエル津軽おのえ荘	平川市 尾上町	廃業: 整理	20年9月老人福祉施設
フラワーランド憩の湯	平川市 尾上町	廃業: 20年	22年11月福家・再生
十和田温泉	十和田市	経営破たん: 20年6月	25年2月再生
ラッコ温泉	青森市	18年6月経営者交代	極楽湯として再生
ホテルフジサワ	八甲田山寒水沢温泉	18年6月前経営者撤退	八甲田リゾートH再生
太陽温泉	おいらせ町	経営者交代	17年3月『和の湯』再生
かんぼの宿十和田	十和田市 焼山	閉鎖: 17年	26年リゾートホテル再生
古牧温泉	三沢市	倒産: 16年11月	翌年星野グループ再生
奥入瀬溪流ホテル	十和田市	倒産: 16年11月	翌年星野グループ再生
谷地温泉	十和田市	倒産: 16年11月	20年伊東園ホテル再生
平賀みちのく温泉	平川市	廃業: 16年	同年老人福祉施設
計25施設			

(注) 新聞報道、現地調査等から2014(26年)7月末現在で筆者作成。

5 温泉施設インフラ整備の課題

先に表1で掲げた362施設の中には、湧出量の低下と熱量の不足に悩んでいる施設が数多くある。自然湧出の温泉でさえ、湯守が湯の花などを取り除く努力をしないと良質の源泉確保は難しい。一例を挙げると、嶽温泉郷では温泉宿の主人が湯守団体を結成して、毎年源泉周辺のメンテナンスを行うことで一定の湯量を確保している。

青森県が発行した『青森県温泉地質誌』(1997〔平成9〕年3月)によれば、青森県の温泉の多くが1955(昭和30)年代から1975(昭和50)年代の高度成長時代に掘削されている。昨今、橋梁、水道管、都市ガス管、道路、建築物、トンネルなど公共施設の老朽化・更改のインフラ整備が話題であるが、温泉施設も同様である。

温泉施設でよく聞くのが、湯温の低下である。既に廃業となった七百温泉などは隣接の東北新幹線工事以降温度が下がったと訴えていたが、それだけではない様に思われる。施設の維持に膨大な費用を要するのが宿泊施設で、消防法等の法改正に伴うメンテナンス費用も大変である。以下、現地に通り、聞き取りした6つの事例を考察する。

(1) 姉戸川温泉 単純温泉(アルカリ性)

上北・十和田エリアで、現在継続的に注視観察している姉戸川温泉は、近年著しく泉温が低下している。開業当初44.5℃、pH8.6と

いう申し分ない湯勢が、気付いた時点には計測値38.5℃と、北国の温泉としては厳しい湯温であった。2014(平成26)年4月に再実査した時点では、37.7℃とさらに泉温が下がっていた。昨年経営者が亡くなり、後継者にヒアリングすると、「ここは夏向けの温泉だよ」とやや自嘲気味に語り、先の見通しは不明とのことである。

しかしながら、温泉経営への熱意は枯れず、「夏には遠く関西からもお客が来る」と熱く語る姿勢に営業継続が期待される。

(2) 新屋温泉 単純温泉(アルカリ性)

中南津軽エリアの新屋温泉は湯の色が透明なエメラルドグリーンで知られている。合名会社経営の公衆浴場で、現在の社長は黒石で養鶏業を営んでいる。1986(昭和61)年開業時の泉温は45℃、現在は湯口で41.9℃である。この温泉は近年、揭示泉質が変わった。

5、6年前の大改装(浴室手すり設置、天窓の支え柱、内装張替等)前後から、含硫黄-ナトリウム-硫酸塩・塩化物泉(硫化水素型)から、単純温泉へと表示が変更され、浴感も変化した。まず、微硫黄臭が入り混じった心地良い石油臭が薄くなった。さらに、一定の湯量に達しないと透き通るエメラルドグリーンにはならなくなった。極端なときは白濁(気泡)の時もある。聞き及んだところでは、色々努力しているそうであるが、源泉使用のカーンのお湯が38℃前後ということから、



写真1 姉戸川温泉の浴槽
(注)筆者撮影。



写真2 新屋温泉の浴槽
(注)筆者撮影。

泉温の低下に原因があると推量される。

(3) 三内温泉 食塩泉(含硫黄)

東津軽エリアの三内温泉は青森市内にある。東北新幹線新青森駅南口から車で5分という便利さ、合わせて三内丸山縄文遺跡隣接という好立地である。ここは46℃、食塩泉(含硫黄)という泉質であったが、2012(平成24)年に突如営業休止となり、翌平成25年5月に再開された。2014(平成26)年6月調査では依然と変わらない湯の勢いであるが、湯量、湯温とも定まらない場合もあるとのことである。



写真3 三内温泉の浴室
(注)筆者撮影。

(4) 白神温泉・静観荘 重曹泉(含食塩)

西北津軽エリアの白神山地が世界遺産になったのは21年前の1993(平成5)年である。この白神温泉・静観荘はそれ以前の1978(昭和53)年、36年前に開業している。建物の老朽化は激しく、何よりも泉温が低いのが致命



写真4 白神温泉静観荘の浴室
(注)筆者撮影。

的である。開業時には42℃であった泉温は調査時には35.7℃であった。男女別々の浴室も片方は閉鎖されていた。

体温よりも低い温泉は加熱しないと営業継続は難しい。調査時に女将から「この温泉を買い取ってください」と懇願された。白神山地の海岸温泉群(黄金崎不老死温泉、みちのく温泉、鍋島温泉)の中で最も白神山地に近く、JR五能線陸奥岩崎駅に近い地の利を今後の経営に活かしたいものである。

(5) 経営が交代した著名6温泉施設

温泉施設を維持するためにやむなく自力再建を断念した著名施設が複数ある。

浅虫温泉「海扇閣」(石膏泉)と葛温泉(芒硝泉)の2つの施設は、東日本大震災後に日本温泉地域学会第18回研究発表大会及び東日本大震災復興支援シンポジウムと東日本災害復興支援エクスカッション・交流会を開催した、青森県を代表する温泉施設である。

東日本大震災後の顧客減、老朽化した施設の維持などから、浅虫温泉「海扇閣」は県外で温泉経営をする企業に経営参画(社長派遣)を依頼し、葛温泉は県内で城ヶ倉温泉(単純温泉)などを経営する地元企業の(株)城ヶ倉観光に施設を譲渡した。

さらには、むつ湾岸の老舗「まかど温泉ホテル」(石膏泉)も、地元資本が継承して頑張っていたが経営難に陥り、秋田県仙北市の秋田共栄観光(株)が買収し、「まかど観光ホテル」となる。



写真5 改装された葛温泉
(注)筆者撮影。



写真6 厳冬期の谷地温泉

(注) 筆者撮影。

湯治場として知られる谷地温泉(単純硫黄泉)は、大手の伊東園ホテルズが経営を引き継いだ。

三沢「古牧温泉」と大鰐温泉「南津軽錦水」は星野リゾートが経営を引き継ぎ、それぞれ「星野リゾート青森屋」(単純温泉)、「星野リゾート奥入瀬溪流ホテル」(単純硫黄泉)、「星野リゾート界津軽」(石膏泉)として再生した。

この他にも青森県内では、湯の出が悪くなった、湯温が定まらない、経営が銀行管理になどの話があちこちで聞かれるようになった。直近では、先に挙げたように井上靖が小説『海峡』の構想を練った下風呂温泉の老舗「長谷旅館」も2014(平成26)年4月から後継者難で休業となった。同年7月現在、「工事中につき休業致します」の張り紙が掲示されている。

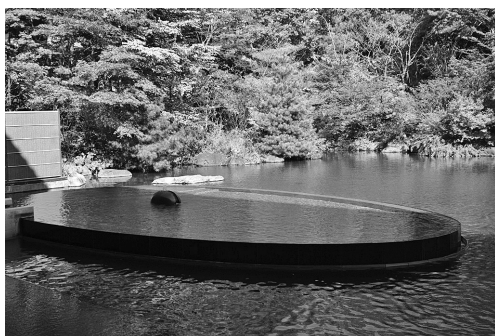


写真7 古牧温泉の露天風呂

(注) 筆者撮影。

ここで温泉施設インフラ整備の課題をまとめると、次の6項目となる。

- ① 少子高齢化による経営者の高齢化と後継者不足、温泉療養客(湯治客)の減少
- ② 海外旅行の普及と、ライフスタイルの変容による温泉観光や温泉保養客の減少
- ③ 施設の老朽化と法令順守(改正耐震改修促進法)による施設維持費用の増大
- ④ 2008年の第三次オイルショック以降の燃料代高値で自家用車の利用客減
- ⑤ 2011年の東日本大震災・福島第一原発事故風評被害による温泉地観光客の激減
- ⑥ 利用客減による経営資本の枯渇

6 まとめ

上記5温泉施設インフラ整備の課題の事象は、全国の温泉施設にも共通の問題・課題である。筆者が所属する温泉地活性化研究会が2003(平成15)年度に調査して、青森県に提出した報告書『地域(温泉地)に内在する資源の発掘・活用による地域再生の調査研究』では、源泉総数の内、42℃以上の高温泉の割合を高温泉指数とし、「温泉力」評価の一指標(温泉評論家石川理夫氏が提唱)としている。

環境省「都道府県温泉利用状況」によれば、その指標は青森県では2002(平成14)年度1,021本中、747本で73%であった。2012(平成24)年度では、高温泉指数は1,093本中671本、61%となっている。この10年間で、源泉は72本増加しているのに、42℃以上の高温泉が逆に76本も減少し、高温泉指数も12%低下しているのである。

このことは、高度成長期からバブル期、そしてバブル崩壊後のデフレ経済下、燃料の高騰・高止まり、2011(平成23)年3.11東日本大震災・福島第一原発事故による逆境の温泉経営環境下において、何物にも代えがたい源泉そのものが疲弊し、温泉力が低下しているという事実を示している。

青森県を代表する浅虫温泉郷では、浅虫温泉旅館組合提供資料を分析すると、1993(平

成5)年度の宿泊客数25万人、旅館数23軒、地域住民数2,323人に対して、2013(平成25)年度は宿泊客数16万9千人、旅館数11軒、地域住民数1,497人となっており、温泉地域経済そのものが地盤沈下していることが裏付けられている。このことはバブル崩壊や3.11東日本大震災(風評被害)などの影響だけとは片付けられない。

温泉観光そのものが観光客の支持を失っていることと、温泉施設(建物、安全安心諸設備などのハード)が限界状態に来ていることも合わせて考えなければならない。

青森県にあるほとんどの源泉井戸は40～50年ほど経過しており、疲弊の原因は様々想定される。揚湯管・送湯管のスケール付着による湯量減、揚湯管・送湯管の腐食等で地下水浸潤による泉質変化・泉温低下などが多くの温泉施設を困難な状況に追い込んでいく。同時に、多額な費用を要する温泉施設インフラ整備ができない小さな温泉施設も多数存在している。本考察はその一部を示したに過ぎない。

高度成長期、潤沢かつ廉価な開発費用のもとに行われた温泉開発の結果、温泉施設は今日の低成長時代に高額なメンテナンス費用での施設更改時期に突入したといっても過言ではない。温泉施設維持には、少子高齢化による後継者不足、国内観光地の衰退(東日本大地震・福島第一原発事故による顧客減)、デフレ経済下の収入減など多くの問題を抱えている。このことは、全国7,717(平成24年度現在)の温泉利用公衆浴場のほとんどの施設が抱える共通の問題と推量する。よって考察から次の4項目の対応策をまとめた。

(1) 温泉施設整備の効率的手法の確立

源泉疲弊等に対応する温泉施設のインフラ整備を効率よく、かつ廉価で出来る画一的手法の開発・提供が急がれる。

(2) 温泉施設の整備に関わる制度の確立

温泉施設経営に関わる公的機関(例えば、

温泉保養施設活性化機構)を設置し、温泉施設が地域住民の健康と保養・癒しの拠点となっていると認定される場合、次の様なセーフティネットの構築が望まれる。

①温泉施設のインフラ整備の銀行借入れに対する利子補給などの金融措置

②温泉施設が休・廃業した場合、新たな担い手が出現するまでの一定期間当該施設の管理運用措置

(3) 官公署が保有している温泉利用に関するビッグデータの開示

温泉施設の実態(温泉施設の分布数・先、掘削年代、井戸数、利用形態、温泉関連経済指数などメンテナンス関連データ)情報を行政当局はなかなか開示してくれない。

一方で、どうすればいいか悩んでいる施設も多数ある。この両者の共通の利益を探るためにも、可能な限り情報開示することで調査・研究が進展し、温泉施設のインフラ整備も促進される。

(4) 日本温泉地域学会会員による全国の温泉地の緊急調査による現況の把握

今回、筆者は青森県の温泉地の実情を調査したが、同じようなデータ集積・現地調査・分析を全国レベルで行い、関係省庁、機関へ問題提示するのも温泉地に関わる研究者としての責務であろう。

参考文献

- 1) 青森県観光国際戦略局観光交流推進課(2011):『あおり立ち寄り温泉湯めぐり路』。
- 2) 温泉地活性化研究会(2003):『地域(温泉地)に内在する資源の発掘・活用による地域再生の調査研究』。
- 3) 石川理夫(2003):『温泉の法則』集英社新書。
- 4) 阿岸裕幸他編(2012):『温泉の百科事典』。
- 5) 青森県環境保健部自然保護課(1997):『青森県温泉地質誌』。
- 6) 高橋正樹・小林哲夫編(1999):『東北の火山』築地書館。
- 7) 日本温泉地域学会(2003～2014):『温泉地

域研究』1～22号。

- 8) 環境省H P (2014年7月閲覧)。
- 9) 青森県H P (2014年7月閲覧)。
- 10) 青森県内温泉関連H P (2014年7月閲覧)。

台湾・泰安温泉における温泉観光開発 Tourism Development of Taian Spa at Miaoli prefecture, Taiwan

浦 達雄* 小堀 貴亮** 徐享鑫***
Tatsuo URA Takaaki KOBORI Herman HSU

キーワード：台湾 (Taiwan)・苗栗県 (Miaoli prefecture)・開発 (development)・
温泉観光 (spa tourism)・経営動向 (business trend)

1 はじめに

(1) 研究の背景

台湾には100カ所以上の温泉地が成立し、いわゆる温泉観光地は15カ所を数える¹⁾。台湾の温泉地といえば、北投・陽明山・関子嶺・四重溪の4大温泉地、そして烏來・礁溪・知本などが知られる(図1)。現在の台湾は一種の温泉ブームを迎え、温泉ホテルの新規開業が続いている。その代表例が北投の加賀屋だが、その他では礁溪で老爺大酒店などが開業している。こうした中で、日本同様に癒し系の温泉地が注目を集めるようになった。その代表例が台湾中部の苗栗県に位置する泰安温泉である。温泉地としての歴史は日本統治時代にまでさかのぼるが、溪谷という環境の中で1990年代後半から温泉ホテルの開業が続いている。

なお、台湾には警光山荘という屋号の温泉施設が点在している。これは日本統治時代に日本の警察が設置した温泉施設で、いわゆる名湯と言われる温泉地に残されている。泰安温泉では温泉集落の一番奥に立地し、独特の雰囲気を出している。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、山間の癒し系の温泉地として注目を集めている泰安温泉を事例として取り上げ、温泉観光開発の実態、特に温泉ホテルの経営動向の実態について究明することである。研究の方法は、現地における野外観

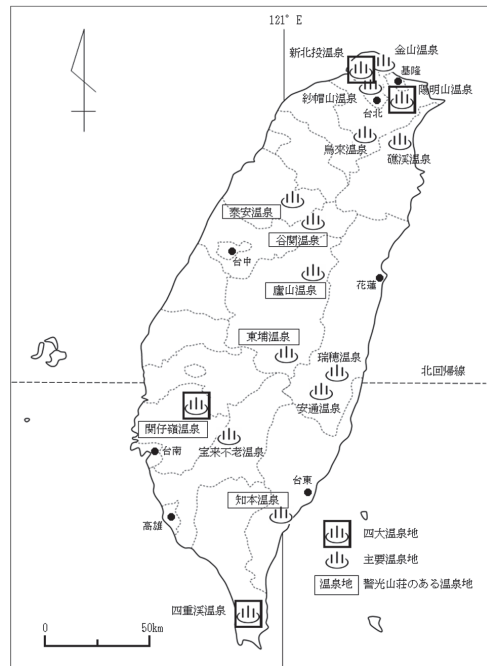


図1 台湾における主要温泉地の分布 (2013年)

(注1) 中華民国交通部観光局により小堀貴亮作成。

(注2) 現在、廬山は休業中。

察、そして温泉ホテル経営者に対する聞き取り調査などである。経営数値を中心に聞き取り調査を実施し、その概要の把握に努めた。また、台湾の観光や温泉に関するHPなどを参考にした²⁾。

(3) 従来研究成果

台湾における温泉をテーマとした旅行記や訪問記は比較的多い。例えば、浦達雄(2012)

*大阪観光大学 (Osaka University of Tourism) **共栄大学 (Kyoei University)

***錦水温泉飯店 (King's Resort & Spa)

の報告がある。ここでは、台湾の温泉の中でも、南部に位置する関子嶺・四重溪の各温泉地を紹介した。

しかし、温泉観光地を事例とした実証的な研究成果となると、観光地理学や関連分野の立場では意外と少ない。先駆的な研究としては山村順次(1990)がある。山村は台湾全体の温泉地の動向を概観し、台湾における温泉地の実態を明確にした。

その他、日本温泉地域学会の口頭発表として、小堀貴亮(2010)・西村りえ(2012)の研究がある。小堀は烏来温泉の現状と課題を明確にし、西村は日本統治時代の面影が残る温泉地について報告した。

2 泰安温泉の概観と歴史

(1) 泰安温泉の概観

泰安温泉は、台湾中部・苗栗県に位置する温泉観光地である。鳥嘴山の北麓、汶水溪谷の上島公路に沿って温泉集落が成立している(図2)(写真1、以下写真は2013年11月1日撮影)。上流部には警光山荘(写真2)が位置し、下流に向かって温泉施設が点在している、源泉は10カ所、泉質はアルカリ性の炭酸泉、無色無臭で泉温は47℃とされている(表1)。苗栗県政府源泉は2001年7月に掘削され、深度は150m、湧出量は1,700 L/mとなる。掘削場所は警光山荘の下方で、配管線は警光山荘から虎山温泉会館まで約5kmである。設備投資額は約1.2億円(2013年10

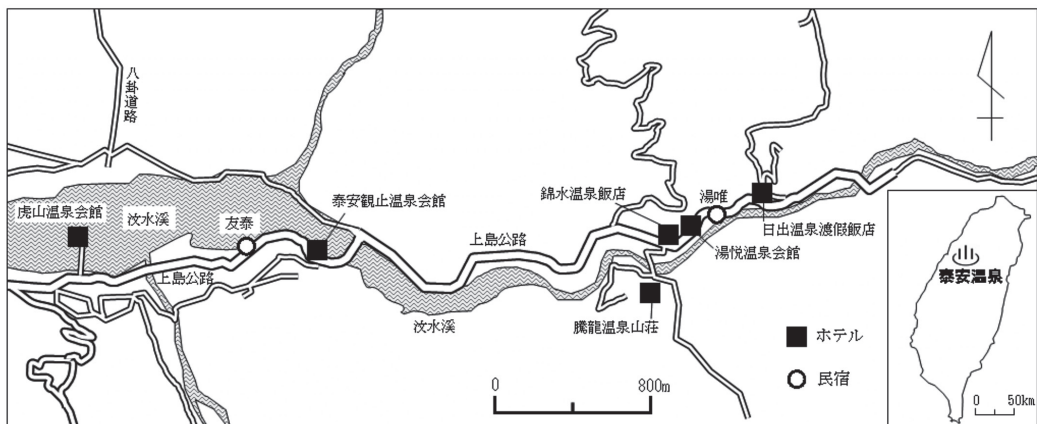


図2 泰安温泉におけるホテル・民宿の分布(2013年)

(注)台湾観光協会の資料等により小堀貴亮作成。



写真1 泰安温泉(上流を望む)



写真2 警光山荘の外観

表1 源泉の所有形態

独自源泉のみ使用			
警光山荘	虎山温泉会館	騰龍温泉山荘	錦水温泉飯店
独自源泉+苗栗縣政府(公共管線)引湯			
日出温泉渡假飯店	竹美山閣	湯悅温泉会館	湯唯
苗栗縣政府(公共管線)引湯			
川上	泰安觀止温泉会館		

(注1) 聞き取り調査により浦達雄作成。

(注2) 日出温泉渡假飯店は独自源泉を2本所有。

月30日現在、関西国際空港では1元 = 3.76円)を数える。

2007年7月、配湯(公共管線の配線)を開始し、2011年12月に公共管線(かんせん)の経営管理会社(泰安温泉取供事業股份有限公司)が成立した³⁾。源泉の所有形態は、独自源泉のみ使用4軒、独自源泉+引湯4軒、引湯2軒となっている。

ホテルとして日出温泉渡假飯店・湯悦温泉会館・錦水温泉飯店・騰龍温泉山荘・泰安觀止温泉会館・虎山温泉会館の6軒、民宿として湯唯民宿・友泰民宿温泉館など27軒が開業している⁴⁾(表2)。開業年は1974年が一番古く、続いて1992年で、2001年以降新規開業が続いている。経営者の出身地は地元と近在が多いが、基隆市、嘉義市からの参入もみられる。共同浴場は存在しない。

ここでは、新旧合わせて3軒のホテルを事例として取り上げ、その経営動向の概要を把握することにした(表3)。

(2) 泰安温泉の歴史

温泉の発見は1908(民国の前3)年に先住民(タイヤル族)の首領・DULAI GAINUが

表2 泰安温泉におけるホテル・民宿の実態

形態	屋号	開業年	経営者出身地
ホテル	虎山温泉会館	1974年	台中市
	騰龍温泉山荘	1992年	大湖郷
	錦水温泉飯店	2001年	公館郷
	日出温泉渡假飯店	2002年	泰安郷八卦村
	泰安觀止温泉会館	2006年	基隆市
	湯悦温泉会館	2008年	嘉義市
民宿	友泰民宿温泉館	2008年	泰安郷
	湯唯民宿	2008年	雲林県

(注) 聞き取り調査により浦達雄作成。

獲物を追いかけていた時と言われている。日本統治時代(1895 ~ 1945年)の1910(民国の前1)年、日本人が「警官の療養所」を建て、温泉地として成立することになった。汶水溪の谷に臨んで半島の形を呈するため、一帯を「上之島」と呼び、温泉を「上島温泉」と称したのである⁵⁾。第2次世界大戦後、台湾の警察が接收して「警光山荘」となった。

1974(民国63)年、汶水溪の川中島で「虎山温泉-緑園館」(現在の虎山温泉会館)が開発された。敷地面積は約1,000㎡で、日本に滞在経験がある華僑(台中出身)が帰国して開業したのである。その後、新規のホテルや民宿の開業が続いている。

温泉地名は、1963(民国52)年に源泉が虎山にあったことから、当時の台湾省主席黄杰が虎山温泉、さらに1978(民国67)年には後の蔣経国総統が国民の泰安を願って泰安温泉と命名し、現在に至っている。

3 騰龍温泉山荘

(1) 概要

泰安温泉の温泉ホテルでは2番目に古く、1992年の開業である(写真3)。開業動機は自然の中で日本の温泉施設を作ることである。父は元軍人で、日本に留学した。娘は日本留学の経験がある。現在の経営者は55歳(台湾人・大湖郷出身)で、以前は台湾鉄道で勤務の経験がある。敷地面積は5万㎡と広く、付近のホテルでは一番広大である。

温泉掘削は1992年に実施し、総投資額は2.5億円となる。源泉の深度は地下718m、泉温は約50℃、湧出量は220L/m、泉質は

表3 泰安温泉における温泉ホテルの経営動向

	騰龍温泉山莊	錦水温泉飯店	日出温泉渡假飯店
開業年月	1992年	2001年	2002年9月
開業動機	自然の中で日本の温泉施設を作る	1999年台中地震で付近の温泉枯渇 地域貢献	運命
投資額	2.5億元	10億円	1.8億元
経営者	55歳(台湾人・大湖郷出身) 台湾鉄道勤務 父は元軍人。日本留学。娘は日本留学経験。	61歳(台湾人・公館郷出身) 公務員、その後、建設業 父はコンビニエンスストア経営。	54歳(タイヤル族・泰安郷八卦村出身) 父は元警察・郷長。
土地面積	5万㎡	1万㎡	3万㎡
温泉	1992年掘削 地下718m、泉温50℃ 旧重曹泉 220L/m	2000年掘削、2013年7月増掘 地下480m、43℃ 旧重曹泉 150L/m	2002年、2006年掘削 地下100m、泉温50℃ 地下200m、泉温52℃ 泉質は硫酸を含む 360L/m、300L/m
利用料金	家族風呂800元(2人)(60分) 内湯(210元)	家族風呂800元(2人)・1,400元(4人)(60分)	家族風呂1,400元(2人)(90分)
客室 内訳	18棟66室	83室 59室(4人用) 8室(和洋室・2～6人用)など	21室 16室(2人用) 5室(4人用)
収容人員	285人	320人	60人
付帯施設	会議室・レストラン(2)・男女別内湯・ 家族風呂(42)・体育館・グラウンド	会議室(4)・レストラン(2)・露天風呂・ 家族風呂(18)	会議室・レストラン(3)・露天風呂・家 族風呂(18)
年商	1億元 ネット0%・エージェント70%・直30%	1億元(対前年比15%アップ) ネット20%・エージェント50%・直30%	3,000万元 ネット40%・エージェント30%・直30%
オン オフ 顧客	7・8・11・12・1・2月 5・6月 台湾人95% 台南・高雄・台中・台北など 外国人5% 中国・香港・日本など	12・1・2月 3・6・9月 台湾人80% 台中・台北など 外国人20% シンガポール・マレーシアなど	1・2・12・11月 3・6・9月 台湾人90% 台中・高雄・台北など 外国人10% 中国・香港・シンガポール・日本 ・米国など
スタッフ	約30人(正社員25人)	45人(正社員22人)	約20人
その他	学生のキャンプが多い 温泉施設は2013年改修 家族風呂・内湯・レストラン新装 改修費用2,000万元 料理は山菜・鱒・客家料理 アスレチックスポーツが楽しめる	名物料理は客家料理 高雄で英語学校経営 増掘の投資額は1,100万元 スタッフの2/3は大学卒 LOHAS(ロハス)な旅の提案 Lifestyles of Health & Sustainability	郷里の八卦村で民宿経営 2008年5月開業 屋号は土牧健康農庄 父の名前・土牧を採用 土地は35万㎡(竹林) 土地は1993年頃取得 7室 内訳は5室(4人用)・1室(3人用)・1 室(2人用)、他にキャンプ場

(注1) 聞き取り調査により浦達雄作成。

(注2) 1元 = 3.76円(2013年10月30日現在)。

(注3) 空欄は未調査。



写真3 騰龍温泉山荘(遠望)



写真4 騰龍温泉山荘(男内湯)

旧重曹泉となる。

(2) 主な施設

宿泊施設はコテージ形式で、客室は18棟66室(収容人員285人)となる。主な付帯施設は会議室・レストラン(2カ所)・男女別内湯・家族風呂(42カ所)・体育館・グラウンドなどで、家族風呂とスポーツ施設が充実している(写真4)⁶⁾。温泉利用料金は家族風呂800元(2人、60分)、内湯(210元)となる。

(3) 経営数値

年商(2012年)は1億元を売り上げる。送客実績の内訳はネットエージェント0%・エージェント70%・直30%の割合で、旧来型のエージェントの利用が多い。オンシーズンは7・8・11・12・1・2月で、オフシーズンは5・6月となる。

市場は台湾人95%、外国人5%で、前者は台南・高雄・台中・台北など、後者は中国・香港・日本などである。

(4) その他

スポーツ施設やアウトドア環境の充実(渓谷・山・河川)で、他の温泉ホテルに比べると、学生のキャンプの多いことが特色である。台北や台中からの学生のフレッシュマンキャンプも行われている。

現在の温泉施設は2013年改修したもので、改修費用2,000万元を数え、特に男女別内湯(裸入湯)に特色がある。料理は山菜・鱒・客家料理など地産地消となる。山や河川など

自然を生かしたアスレックススポーツが楽しめることがセールスポイントと言えよう。

4 錦水温泉飯店

(1) 概要

開業は2001年(写真5)で、開業動機は1999年台中地震で付近の温泉が枯渇したので、地域の活性化を意図したのである。経営者は61歳(台湾人・公館郷出身)、以前は公務員、その後、建設業を経営して、温泉ホテル経営に参入した。台湾温泉観光協会の理事長の要職をこなした。

敷地面積は1万㎡を数える。温泉掘削は2000年に行い、2013年7月に増掘を行った。総投資額は2.5億元で、源泉の深度は地下480m、泉温は43℃、湧出量は150L/m、泉質は旧重曹泉となる。増掘の投資額は1,100万元を数える。

(2) 主な施設

客室はホテル形式で、83室(収容人員320人)を数える。内訳は59室(4人用)、8室(和洋室・2~6人用)などで、大部屋が多い。付帯施設は会議室(4カ所)・レストラン(2カ所)・露天風呂・家族風呂(18カ所)となる(写真6)。本格的な国際会議室を付帯し、大人数の会議需要にも対応している。温泉利用料金は家族風呂800元(2人)・1,400元(4人)(60分)となる。



写真5 錦水温泉飯店(外観)



写真6 錦水温泉飯店(露天風呂)

(3) 経営数値

年商(2012年)は1億円で、対前年比は15%アップとなる。送客実績の内訳はネットエージェント20%・エージェント50%・直30%で、旧来型のエージェントの利用が多い。オンシーズンは12・1・2月、オフシーズンは3・6・9月となる。

市場は台湾人80%、外国人20%で、前者は台中・台北など、後者はシンガポール・マレーシアなどが多い。

(4) その他

名物料理は地産地消の客家(はっか)料理で、地場産品の食材にこだわっている。日頃からLOHAS(ロハス、Lifestyles of Health & Sustainability)な旅の提案をしており、山間という環境、渓谷美、温泉、客家料理など、健康や癒しを前面に出したホテル経営を心がけている。スタッフの3分の2は大学卒で、フレンドリーなおもてなしを行っている。現在、副業として高雄市で英語学校を運営している。

5 日出温泉渡假飯店

(1) 概観

開業は2002年9月(写真7)で、開業動機は運命となる。現在の経営者は54歳(タイヤル族・泰安郷八卦村出身)で、父は元警察で郷長を務めた人物である。敷地面積は3万㎡で、温泉掘削は2002年に行い、2006年に増

掘し、源泉は2本となった。総投資額は1.8億円を数える。源泉の深度は、それぞれ、地下100m、200m、泉温は50℃、52℃、湧出量は360L/m、300L/mとなる。泉質は硫酸を含む。

(2) 主な施設

客室はホテル形式で、客室21室(収容人員60人)で、内訳は16室(2人用)・5室(4人用)となる。付帯施設は、会議室・レストラン(3ヵ所)・露天風呂・家族風呂(18ヵ所)で、家族風呂が充実する。温泉利用料金は家族風呂1,400元(2人)(90分)を示す。

(3) 経営数値

年商(2012年)は3,000万元を数える。送客実績の内訳はネットエージェント40%・エージェント30%・直30%で、ネットエージェントの利用が比較的高い。オンシーズンは1・2・12・11月、オフは3・6・9月となる。市場は台湾人90%、外国人10%で、前者は台中・高雄・台北など、後者は中国・香港・シンガポール・日本・米国などで、日本人も比較的多い。

(4) その他

2008年5月、郷里の八卦村で民宿を開業した。屋号は土牧駅健康農庄で、父の名前・土牧を採用した。敷地面積は35万㎡で、主に竹林で、これを開墾した。土地は1993年頃に取得した。民宿は2階建てで、客室は7室を数える。内訳は5室(4人用)・1室(3



写真7 日出温泉渡假飯店の外観



写真8 牧駅健康農庄のキャンプ場

人用)・1室(2人用)、他にキャンプ場(写真8)がある。

6 むすび

研究の結果は次のように整理することが出来る。

①いずれの温泉ホテルも源泉を所有している。

②アスレチック・ロハス・民宿経営など、個性的なホテル経営を行っている。

③温泉施設、とくに家族風呂が充実している。

④会議室を付帯し、会議や合宿などの需要に対応している。

⑤料理は客家料理が主体で、食材は地産地消となる。

⑥エージェントの割合が高い。利用客は台湾人が主体で徐々に外国人が増えている。

⑦問題点は道路の整備である。溪谷に位置するため、一部の道路幅が狭い。サイクリングやハイキングをする際は車やバイクの通過で危険が伴う。これは解決に時間がかかるので、当面の間は、ホテルを中心とした遊歩コースなどの整備を求めたい。

⑧現在、一施設完結型の温泉地の状況を呈しており、今後は温泉地域共同体として、地域間競争を勝ち抜いて欲しい。

⑨泰安温泉の観光動態については未調査で、今後の研究課題としたい。

付記

本研究は、日本温泉地域学会第23回研究発表大会(皆生温泉・2014年5月25日)で口頭発表した内容に追加・修正したものである。

なお、現地調査は2013年11月1日と2日の両日で実施した。写真は11月1日、浦達雄が撮影したものである。

謝辞

面倒な聞き取り調査に対して、親切丁寧に応対された台湾の温泉関係者の方々に心から御礼を申し上げます。

注

1) 15ヶ所中、廬山温泉は台風被害で廃止。

2) 主なHPは次の通り。

中华民国交通部觀光局

<http://admin.taiwan.net.tw/public/public.aspx?no=272>

台湾名湯温泉

<http://jp.taiwan.net.tw/m1.aspx?sNo=0003035>

台湾泡湯

<http://www.taiwanhotspring.net/news.aspx?type=0>

台北旅遊網

<http://www.taipeitravel.net/jp/>

台湾通信

<http://taitsu-news.com/front/bin/ptdetail.phtml?Part=top13052102>

台湾民宿網

<http://miaoli.fun-taiwan.com/AllHouseAroundPlayItem.aspx?pid=20100419013925>

- 3) 関係者に対する聞き取り調査による。
- 4) 苗栗県発行のパンフレット・小冊子などによる。
- 5) 泰安湯唯温泉のパンフレットなどによる。
- 6) 台湾の温泉は、内湯・露天風呂・プール・家族風呂（貸切風呂）などに分類できる。内湯は男女別の裸入湯（日本風）、露天風呂は裸入湯または水着着用、プールは水着着用、家族風呂は裸入湯となる。日本のような家族風呂形式の露天風呂は少ない。

参考文献（発行順）

- 山村順次（1990）：「台湾の温泉地」温泉58巻1号、14～17頁。
- 小堀貴亮（2010）：「台湾の烏来温泉の現状と課題」日本温泉地域学会第16回研究発表大会要旨集。
- 西村りえ（2012）：「日本統治時代の面影の残る台湾の温泉」同上第19回研究発表大会要旨集。
- 浦達雄（2012）：「URAの湯遍路旅日記－アジア・太平洋編－」クリエイツ、150頁。